



## 「宮本武蔵と加古川」

宮本武蔵のイメージについては、吉川英治の歴史小説『宮本武蔵』が大きな影響を与えているといっても過言ではありません。特に生誕地について『宮本武蔵』の中では、美作国宮本村となっています。しかし、武蔵本人が著した『五輪書』に「生国播磨」とあることや養子宮本伊織（のちに小倉藩家老）に関係する加古川の泊神社に残されている棟札や当寺に寄進した燈籠が残っている点から播磨説が地元では根強くいられています。

『五輪書』によると、13歳で初めて決闘・勝利し、以来29歳まで60余回の勝負を行い、すべてに勝利したとあります。特に有名な場面が「巖流島の決闘」で、豊前小倉藩領舟島で、岩流なる兵法者と闘ったとあります。試合の行われた時期についても諸説あります。



棟札や燈籠が残る泊神社には、他に加古川市指定文化財の絵馬「三十六歌仙絵馬」があります。作者は甲田重信（狩野探幽の弟子）で、近隣にも高砂市の米田神社、小野市垂井町住吉神社に同様のものが残されています。

他に泊神社の鳥居は、西に向かって建っています。鳥居の多くは南面に向って建っていることが多いといわれています。「天子南面す」という風水思想が神社創建にあるからかもしれません。神社の装置として、鳥居－参道－拝殿－本殿が収める地理的条件も影響しているといわれています。



歴史に大きな痕跡を残した宮本武蔵に関係するものが加古川にあることは感動を覚えると同時に歴史のロマンを感じる次第です。